

ささ身の解説は下のページを参照

川崎悟司氏のツイート <https://twitter.com/satoshikawasaki/status/1140960445815087104>

ささみってどこの部位なの？ | トリさばく男 <https://torikatsu-blog.jp/2019/06/ささみってどこの部位なの？/>

博物館展示論

第8講 美術館と人文系博物館の展示

本日の授業資料

tenji2020_8-1-6、pdf×3、mp3×3

1. 美術館の展示 音声ファイル1 tenji2020_8-4.mp3

1) 美術館の文化的位置

美術館はお高くとまっているような印象があるかも知れない。室内の静謐な空間で大人たちが高級文化をたしなむ、そんな様子である。美術の愛好家の間には、美術館は特別な場所であり静かに鑑賞する態度を求める意見がある。園児がはしゃいで走り回る動物園とは対極的な場所ではある。

2) 展示の方法と技術

美術館の資料は美術品である。美術とは視覚芸術であり、美術作品は絵画から彫刻や塑像さらにはテキスタイル（布地、織物）でも、縄文土器から現代美術でも見られることを前提に制作された作品である。つまり美術館の展示資料は、それ単独で鑑賞できる性格を有し、解説が無くとも楽しめる。自然資料では恐竜の化石や美しい鉱物のように多くの人を魅了する資料もあるが、多くは地味で解説によって初めて価値を知るようなものが多い。人文系の資料でも文献のような歴史資料、古い道具などの民俗資料も茶色灰色で華がない。見た目に美しい、あるいは気になる美術資料は特異な存在である。

よって、展示は作品の鑑賞を第一に考え、解説用のグラフィックは目立たないように配置され、文字サイズも小さい。壁面も作品の鑑賞を考えた色彩が採用される。

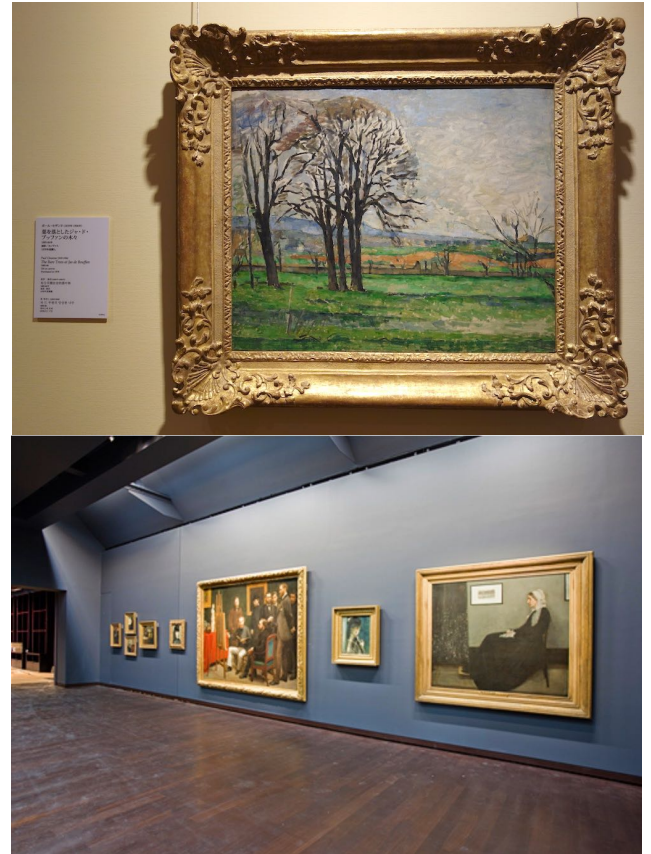
3) 作品と工芸品

ここでいう作品とは芸術作品である。おなじ陶器の器[うつわ]であっても、量産品は作品とは呼ばない。作品と呼べるものは、作者の個性が表現された唯一性の高い生産物である。図画工作の授業で子どもが作るものは、作品である。他方、工芸品は匿名の職人による生産物でキャプションに記されるのは工房名や企業名である。

4) 美術館が作品の価値付けをする

民具が博物館に収蔵されてもニュースにはならず、それが作品の価値付けをすることもない。生活道具などを価値付けするものは文化財保護法で指定文化財に指定されることである。条例もおなじ。他方、美術作品の場合、著名な美術館がコレクションとして購入することが作品や作者の価値を高める。資料に対する美術館の権威が高いともいえる。このことが特定の作家を世界的に著名にする、人々の認識を変える（追随させる）、そして美術市場での価格を押し上げる。アンディ・ウォーホル Andy Warhol がその例。

MoMA Design Store アンディ・ウォーホル <https://www.momastore.jp/shop/r/r0504/>



壁の影響 新生オルセー美術

<http://www.mmm-ginza.org/special/201202/special01.html>



左記サイトから

5) 作品市場が存在する

美術館のコレクションは購入することが形成される。採集が主体の自然史博物館や水族館、寄贈を待つ地方博物館とは大きく異なる収蔵資料といえる。個人コレクターはともにオークション会社との競合／協力関係にある。このことは作品が世界中に分散させる効果を生む。美術館が著名作家をテーマに作品展を企画した場合、資料借用先が世界規模となることにもつながっている。

下は著名なオークション会社のカタログ（＝図録）である。美術館の特別展の図録のようだ。

サザビーズ Sotheby's <https://www.sothebys.com/en/>

クリスティーズ Christie's <https://www.christies.com>

タジャン TAJAN <https://www.tajan.com>



左：Sotheby's Old master & British paintings, Day sale. London 5 December 2013. 269x210, 144pp. 中、右：Christies New York, Fine American paintings, drawings and sculpture Tuesday 28 September 2010. 265x210, 166pp.

2. 人文系博物館の展示

1) 考古系の展示 東京国立博物館の縄文土器の展示 美術館的である

考古学の名称は対象ではなく方法にある。地下に存在する遺物や痕跡から人類の文化を再構築する営みである。対象年代は特定されない。しかし、とくに日本では考古学は歴史学の一分野として認識されている。ひとつ考えて欲しいのは、古い年代の遺物であっても美術作品といえる製作物が存在することである。

注意したいのは、過去と現在の直結である。たとえば縄文土器の相違工夫や造形美を現代日本の技術力の源とするような解説。鎌倉時代であっても日本列島は統一政権が完成していない。現代的な意味での日本人は形成途上である。縄文時代であれば日本という表現も困難である。これを完結に示すことがむずかしい。

展示で陳列されるのは発掘調査による出土品である。考古学ファンは「文化の再構築」を示さずとも、出土品自体で楽しめる。出土品をひたすら並べて比較考察する展示はファン向けといえるだろう。



2) 歴史系の展示

歴史学も方法である。文書を用いて過去を再構築する。古文書〔こもんじょ〕という言葉も日本史では使い方に作法があり、文書〔もんじょ〕とは意思決定に関する文書で発信者と宛先が特定されている手紙のような体裁のものに使う。産物を列記したようなものは「記録」と言う。

過ぎ去った歴史の展示はどうすれば可能か。現在の展示で陳列されるのは主として文書である。日本の場合、江戸時代やそれ以前の文字を読めるのは極少数の専門家に限られる。それにも関わらず根拠資料として大多数にとっては文字列らしき紙片が並ぶだけとなっている。

ほかの展示資料は旧家に保存されてきた伝世品〔でんせいひん〕がある。伝世品は出土品にたいして使われる言葉で、人から人へと代々保存されてきた資料をいう。世界最古級のものが奈良の正倉院の御物〔ぎょぶつ＝天皇の財産〕である。

3) 展示の限界

展示は限られた面積で断定した表現が求められる。書籍や論文、映像や講義などでは可能な例外への言及、レンジの表現などが物理的にできない。見解が定まっていない状況でも、一つに固定しなければならない、曖昧な表現や詳しい論述ができない。これが展示の限界であり、とりわけ近現代の歴史の展示は生身の人間に直接関わることであり時に波紋を呼ぶ。「詳しくはウェブページで」と言いたくなり、事実そのようにしている展示も存在する。

4) 話題となった歴史展示

北海道博物館

2015年に開館した北海道博物館は、1971年に開館した北海道開拓記念館のリニューアルである。全国的に明治100年を祝賀した1968（昭和43）年は、北海道では開道100年と呼び、北海道開拓記念館は本州方面からの移住者による農業開拓の記念碑として設立された。ところが、先住民のアイヌからすれば開拓の歴史は差別や迫害の体験でもあった。開拓は近代の北海道の一面であり、勝者の価値観である。ちなみに英語名称は Historical Museum of Hokkaido と開拓 cultivation や reclamation を用いていない。

現在の北海道博物館は名称から中立的である。開拓記念館の時代を含め、展示更新のたびにアイヌ文化の扱いが増加している。日本の行政の北海道の展示から、北海道島の歴史へと内容が変化したとも言える。問題は、展示から開拓、とりわけ入植の事実と入植者の歴史を消し去ったことにある。開拓は負の側面もあったが、事実である。事実自体を削除することは日本における歴史の取り扱いに共通する課題と考える。

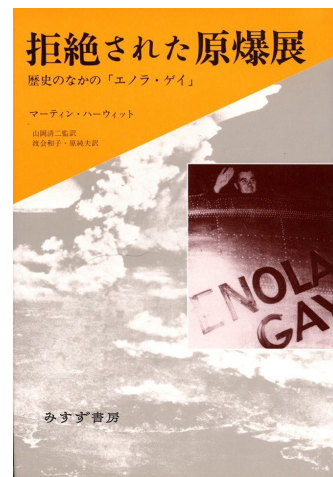
エノラ・ゲイ

1995年、ワシントンの国立スミソニアン航空宇宙博物館は、広島に原爆を投下したB29爆撃機「エノラ・ゲイ」を中心とする米国初原爆展を企画した。しかし、この企画は国内に激しい論議を引き起こし、米国議会や在郷軍人会などの圧力で、開幕直前の1995年1月、原爆展はついに中止に追い込まれた。当時アメリカでは、連日のようにメディアで報道がくり返され、日本でもテレビや新聞で大きく取り上げられた（みすず書房の下記ウェブページの解説）。

拒絶された原爆展 | みすず書房 <https://www.msz.co.jp/book/detail/04106/>。

スミソニアン航空宇宙博物館におけるエノラ・ゲイの展示 [tenji2020_8-2.pdf](#)

http://www.clair.or.jp/j/forum/c_mailmagazine/201312_3/5-1.pdf



北海道開拓記念館および北海道博物館の展示の変遷。「総合案内」や展示解説書の目次から

右上 北海道開拓記念館（1971-1991）

右下 北海道開拓記念館（1992-2014）

下 北海道博物館（2015-）

最初の展示では、アイヌ文化はテーマ名に現れなかった。展示更新後にテーマ名となり内容も深まった。しかしいずれも過去の歴史という扱いが強い

最新の展示では、アイヌ文化の比重が高くなり、同時代に生きるという視点になっている

北海道開拓記念館 概要 利用案内	北海道開拓記念館 概要 利用案内
常設展示	常設展示
テーマ1 北の夜明け 北海道島の成立12／人類のあゆみ14	テーマ1 北の大地 北海道島の成立12／人類のあゆみ14
テーマ2 先住のひと アイヌの生活と文化20／アイヌ周辺の民族26	テーマ2 アイヌ文化の成立 擦文文化とオホーツク文化20／擦文文化からアイヌ文化へ22 アイヌ民族の生活23／アイヌ民族の信仰26
テーマ3 新天地を求めて 松前藩と蝦夷地の生活30／外国の進出と北方防備33	テーマ3 蝦夷地のころ 中世の蝦夷地30／松前藩の成立31／シャクシャインの戦い32 漁業生産の発達と日本海海運の隆盛33／幕府の北方経営35 近代の序曲36
テーマ4 開けゆく大地 北海道の誕生38／入植・開墾39 殖民地選定と交通路の確保43	テーマ4 近代のはじまり 開拓使政策の開始40／欧米の技術文化の導入41 海を渡ってきた武士たち43／樺太千島領土画定とアイヌ民族
テーマ5 産業のあゆみ 北海道の漁業48／新しい農業の試み50 畜産の移り変わり52／木材の伐りだしと利用53 軽工業の発達54／鉱山の開発55	テーマ5 開けゆく大地 殖民政策の展開48／移住開墾と開拓期の生活48 産業の発達52／交通網の拡大54 開拓期の社会問題と自治権獲得運動55
テーマ6 北のくらし 寒冷地の風俗58／食生活60／灯火と暖房の移り変わり61 教育63／町の発達64／娯楽とスポーツ65	テーマ6 不況から戦争へ 道東へひろがる開拓地58／産業の転換59 生活文化の新しい波62／戦争と北海道63
テーマ7 新しい北海道	テーマ7 戦後の北海道 戦後の改革68／産業の進展70／高度成長と生活の変化72
体験学習室	テーマ8 新しい北海道
収蔵陳列室 民族70／地学74／保存技術78／考古79 文書83／生物86／生活89／産業93 英文による展示内容紹介	収蔵陳列室 地学76／考古79／生物82／民族85／生活88／産業91／文書94 英文による展示内容等紹介
図版一覧 写真撮影・カラー録画 武、モノクロ録画 道	図版一覧 写真撮影・録画 武

第1テーマ 北海道120万年物語 Hokkaido's Tale of 1.2 Million Years

1-1 人類の時代へ On to the Age of Humanity

- 1-1-1 大地のなりたち
- 1-1-2 旧石器文化
- 1-1-3 縄文文化

1-2 北海道独自の文化へ Emergence of Hokkaido's Original Cultures

- 1-2-1 続縄文文化
- 1-2-2 オホーツク文化
- 1-2-3 擦文文化
- 1-2-4 交流と交易のひろがり

1-3 蝦夷地のころ The Age of Ezochi

- 1-3-1 日の本・唐子・渡党
- 1-3-2 アイヌ民族と松前藩
- 1-3-3 蝦夷地の産物コレクション
- 1-3-4 シャクシャインの戦い
- 1-3-5 ロシアの進出とアイヌ民族
- 1-3-6 アイヌ民族と場所請負制

1-4 蝦夷地から北海道へ From Ezochi to Hokkaido

- 1-4-1 箱館開港
- 1-4-2 北海道開拓のはじまり
- 1-4-3 さまざまな移住者
- 1-4-4 アイヌ民族と北海道開拓

第2テーマ アイヌ文化の世界 The Culture and Recent History of the Ainu

2-1 現在を知る The Ainu in Contemporary Society

2-2 伝統を学ぶ The Traditional Culture and Ways of Life of the Ainu

- 2-2-1 食べる
- 2-2-2 着る
- 2-2-3 いのち
- 2-2-4 住まい

2-3 ことばを聴く Ainu Oral Tradition

- 2-3-1 いろいろな物語
- 2-3-2 歌・踊り・楽器
- 2-3-3 見て 聞いて アイヌ文化の世界

2-4 歩みをたどる Recent History of the Ainu

- 2-4-1 時代にいどむ

第3テーマ 北海道らしさの秘密 The Secret of Hokkaido's Unique Identity

3-1 自然の恵みとともに Together with Abundant Nature

- 3-1-1 はばたく!北海道ブランド
- 3-1-2 大地に生きる
- 3-1-3 海に生きる
- 3-1-4 山に生きる
- 3-1-5 道をつなぐ

3-2 四季とともに Together with the Seasons

- 3-2-1 四季を感じる
- 3-2-2 冬を生きる
- 3-2-3 くらしを彩る
三等客車

3-3 〈北海道らしさ〉のア・ラ・カルト Hokkaido's Unique Identity, A La Carte

壁画「開拓」

第4テーマ わたしたちの時代へ Towards Our Time

4-1 アジアの戦争と北海道 The Asian Wars and Hokkaido

- 4-1-1 小樽の社会運動
- 4-1-2 昭和の15年戦争
- 4-1-3 日本敗戦から東西冷戦へ

4-2 高度経済成長の時代 The Era of Rapid Economic Growth

- 4-2-1 石炭から石油へ
- 4-2-2 くらしの大変化
- 4-2-3 さまざまな発言

4-3 いまとこれからを創る Creating Today and the Future

第5テーマ 生き物たちの北海道 The Ecosystems of Hokkaido

5-1 生き物たちのつながり Interaction between Living Things

- 5-1-1 ヒグマがくらす
- 5-1-2 サケがのぼる
- 5-1-3 クジラが打ちあがる

5-2 ヒトの近くの自然 Nature around Human Habitats

- 5-2-1 ヒトの近くで生きる
- 5-2-2 新たな侵入者たち

5-3 北と南の動物たち Living Things of the North and South

沖縄県の名護博物館（旧館閉館）は壁の色を工夫して退屈を防いだ

3. さまざまな人文系の博物館と展示

1) 文学館・個人記念館

個人顕彰の博物館。展示は発展性に欠ける可能性があり、学芸員の研究はどこを目指すかが問われる。

オノ・ヨーコ氏の公式メッセージ [tenji2020_8-3.pdf](#)

https://www.taisei.co.jp/about_us/wn/assets/cms/pdf/10020401.pdf

2) 民族学と民俗学

民族学 ethnology = 異文化の研究 文化人類学 anthropology 国立民族学博物館（みんぱく）

民俗学 folklore = 自文化の研究 社会史 social history 国立歴史民俗博物館、みんぱく

近代以前からの民俗知あるいは在来知を近代装置の博物館が展示する＝近代的解釈をおこなう

3) 郷土博物館

地域の歴史博物館が「郷土博物館」と名乗ることがある 例：網走市立郷土博物館

「郷土」の語は昭和初期（1930年代）の郷土教育で普及した。現在も郷土学習があり副読本が作成されている
歴史民俗資料館 文化庁の補助事業の対象として博物館と並記されてきた。学芸員不在の郷土博物館

古くさい茶色と灰色の資料を展示する工夫が必要 名護博物館（現在新館建築のため展示室閉鎖中）は好事例

4) 戦争博物館

戦争は国と国との間に生じる。そのため他国への視点が問われる。イギリスの大英帝国戦争博物館が有名：イギリスは近代以降敗戦がない＝「常に正しい」 <https://www.iwm.org.uk>

日本には国立戦争博物館はない＝国家として戦争を総括（結果の総合的検討）してこなかった現れである。アメリカもアメリカ歴史博物館でのベトナム戦争の扱いは小さく総括されていない。原爆に関する展示も極めて簡素で被害者の姿は示されない。

靖国神社の遊就館 [ゆうしゅうかん] は戦闘の博物館

<https://www.yasukuni.or.jp/yusyukan/>

展示は古代から始まり充実している。同神社は戦前には国の管理下にあったが戦後は一宗教法人となった。明治政府、初めから全国を統治していたわけではなく、革命政府、の将兵を祀 [まつ] る＝戊辰戦争の旧幕府軍や奥羽越列藩同盟軍、西南戦争の薩摩軍は対象外である。

先の大戦（大東亜戦争または太平洋戦争と呼ぶ）について、被害者の立場の博物館は複数ある。

昭和館 銃後の生活の博物館 <https://www.showakan.go.jp>

平和祈念展示資料館 戦後の兵士と復員・引揚げと抑留の博物館 <https://www.heiwakinen.go.jp>

しょうけい館 戦傷病者（傷痍軍人）と家族の博物館 <https://www.shokeikan.go.jp>



上の写真はアメリカ歴史博物館の原爆とベトナム戦争の展示。太平洋戦争については正義の勝利として大々的に展示している。同館はスミソニアン協会の機関で国立博物館である。原爆の解説の要点は1) 戦争と世界はこの日から一変した（上の紺色部分）、2) 投下時に100万のアメリカ兵が日本に向かっていて2つの原爆で日本は降伏した、の2つ。2番目は100万人の命を救ったことの暗示

4. 日本の国立の博物館

1) 「国立博物館」

日本の国立の博物館は人文系が多い。自然科学を対象とするのは国立科学博物館（科博）と日本科学未来館の2つに限られる。役割分担を概括しておく。国立の博物館の展示は、その国の公式見解と見なされるため。狭義の「国立博物館」は下の4つ。

東京国立博物館 日本列島の先史時代から近世の文化財、東洋の美術品、法隆寺の宝物

京都国立博物館 平安時代から江戸時代までの京都の仏像や美術工芸品

奈良国立博物館 仏教美術品、宮内庁の協力により正倉院展を毎年開催

九州国立博物館 「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える」歴史博物館

2) 「国立美術館」

東京国立近代美術館 明治以降の近代美術品、日本画などの伝統技法を含む

東京国立近代美術館工芸館→2020年夏に国立工芸館として金沢に移転

国立西洋美術館（東京） 戦後にフランスから返還された松方コレクションを展示。建物が世界文化遺産

京都国立近代美術館 京都を中心とする近代美術と工芸品

国立国際美術館（大阪） 20世紀後半以降（戦後）の現代美術作品

国立新美術館（東京） 収蔵品なし。巨大な貸し展示場 The National Art Center, Tokyo

3) その他の文部科学省が所管する博物館

国立科学博物館 科学史技術史分野は人文系

国立民族学博物館（みんぱく） <http://www.minpaku.ac.jp>

国立歴史民俗博物館（れきはく） <https://www.rekihaku.ac.jp>

国立アイヌ民族博物館 北海道白老町にあるウポポイ（民族共生象徴空間）のなかに設置された 2020.7.12開館

4) その他の国立の博物館 「博物館」の名称を用いないこともある、英語名称は museum ことも多い

航空自衛隊浜松広報館（エアパーク） <https://www.mod.go.jp/asdf/airpark/>

海上自衛隊呉史料館（てつのくじら館） <https://www.jmsdf-kure-museum.go.jp>

多摩川リバーミュージアム <http://www.ktr.mlit.go.jp/keihin/keihin00469.html>

川の資料館、博物館 <https://www.kkr.mlit.go.jp/river/manabuasobu/watch.html>

5) 未遂／廃止に終わった国立の博物館

国立産業技術史博物館 大阪万博跡地に計画するも未遂かつ資料廃棄

個人ページ「国立産業技術史博物館について」 <https://tanken.com/sanhaku/styled-3/index.html>

朝鮮総督府博物館 断絶：新館建設により日本時代の土地建物名称と決別

アジ歴史グロッサリー＞朝鮮総督府博物館 <https://www.jacar.go.jp/glossary/term2/0050-0020-0020-0010-0400.html>

国立台湾博物館 継承：土地建物資料名称が存続、日本時代の遺産の継承を自認

台北市交通部観光局＞国立台湾博物館 <https://jp.taiwan.net.tw/m1.aspx?sNo=0003090&id=5147>

樺太庁博物館 ロシアが継承：土地建物資料が存続、樺太庁博物館以前のサハリン博物館からの継続性を意識している
サハリン州郷土博物館（ロシア語） <http://www.sakhalinmuseum.ru/ru>

サハリン州郷土博物館 - Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%8F%E3%83%AA%E3%83%B3%E5%B7%9E%E9%83%B7%E5%9C%9F%E5%8D%9A%E7%89%A9%E9%A4%A8>